

# 平成二十五年度「花のまわりみち」

## 俳句入選句

木村 里風子 選

### 特選

(三句)

「二席」

春愁や錆びし初代の圧印機

松原 英明

(評)

造幣局構内に圧印機が置いてあるが一般市民が見ることの出来るのが、この花のまわりみち。桜の美しさより古い圧印機を見ての感情は正に春愁である。時代の変遷を知ったのである。

「二席」

造幣局めぐれる堀の花筏

斎藤 金二

(評)

造幣局をめぐる堀川がある。構内の桜が散り、この堀に浮く。しかも多くは花が連らなっていた。花筏と美化されているが散った桜の哀れさがある。

「三席」

手庇<sup>てびさし</sup>を越へ舞ひ来たる花吹雪

長尾 眞理子

(評)

美しく眩しい花を見るととき日を遮ぎる手庇を作った。折からの風で作者の頭上を越えた飛花は正に花吹雪であった。花吹雪の美しさが言外にある。

入選

(五句)

花の雲新工場に大き玻璃

神波瑞江

(評) 造幣局というと古く堅い感じがするが、時代の進化により工場にも新しさが導入されたのである。明るい工場と花。

爛漫の桜間近に銭造る

亀井朝子

(評) 花の盛りに工場から音が聞こえる。仕事は仕事であり一日も休まない花のまわりみちである。入造者には、この音が別世界のようであったに違いない。

造幣の音ももれくる花回廊

船本世紀子

(評) リズム感のよい工場からの音を美しい桜の花の対称としてひびきあつたのである。

葉桜や雲ゆつくりと流れゆく

中尾尚子

(評) 桜の花がやがて葉桜のころとなる。自然の移り変りを雲に託したのである。

行列の最前列に飛花落花

渡部重利(稻穂)

(評) 花のまわりみちを待っていたのであろう開園日には一番前で入場しようとした。そこえ桜の花が降りかかった。心は一層に逸つであらう。

佳作

(十八句)

犬のせて乳母車ゆく花の屑  
さくら見てかいごのつかれいやされる  
造幣の塀を越えたる花吹雪  
まろび合ふ落花や風の回り道  
風に散る雪の如くに八重桜  
硬貨買ふ長き行列花の風  
身を反らせ見上ぐ鬱金の桜かな  
抱き上げて赤子に見せる花の毬  
満開の桜に映える子の笑顔  
ポーズとり写真撮る子に桜散る  
葉桜となりて静かな通り抜け  
八重桜の毬の弾みて空青き  
足弱き父母と一緒に桜道  
細枝の皆撓みたる八重桜  
花吹雪ふき寄せられたり離れたり  
母とみる笑顔の先に花手毬  
子の髪に挿さんと拾ふ花の房  
日々の事一ト日忘れて花の道

選者吟

若宮直美  
松本信子  
井原淑子  
斎藤金二  
安田市弘  
中原トシコ  
中植勝己  
宮本恭子  
松井哲夫  
斎藤金二  
淡路則之(晩成)  
浅田洋子  
中川ちかこ  
山崎和子  
八島みさ子  
三谷淑子  
石橋康徳  
小倉登代子

遅桜芝生に影の淡きかな

木村里風子